



小児・周産期を中心に急性期医療を充実
90年以上にわたり、
函館市民の健康を守り続ける

社会福祉法人函館厚生院
函館中央病院
北海道函館市

社会福祉法人函館厚生院函館中央病院は、開院以来、一貫して急性期医療に取り組む。小児・周産期、整形外科、腫瘍内科、救急医療を軸に、26診療科を展開。開設から90年を超え、これからも函館市の住民とともに歩む姿勢を明確に打ち出している。

社会福祉法人 函館厚生院 函館中央病院
〒040-8585 北海道函館市本町33-2
TEL.0138-52-1231 <https://chubyou.com>
■診療科目: 内科、消化器内科、腫瘍内科、糖尿病・内分泌内科、神経内科、循環器内科、小児科、外科、乳癌外科、消化器外科、肛門外科、整形外科、形成外科、脳神経外科、心臓血管外科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、精神科、リハビリテーション科、麻酔科、放射線科、病理診断科、歯科口腔外科
■病床数 一般病床527床

普通の医療を普通に、
継続できることが
一番良いこと

函館中央病院
病院長

本橋 雅壽 氏



■ 社会福祉法人 函館厚生院 運営施設・事業



病院
函館中央病院 函館五稜郭病院 ななえ新病院
看護学校
函館厚生院看護専門学校
児童福祉
児童養護施設 くるみ学園 児童家庭支援センター くるみ
入所施設
ケアハウス 豊寿 ケアハウス ベイアニエス 特別養護老人ホーム(指定介護老人福祉施設)百楽園 特別養護老人ホーム(指定介護老人福祉施設)ももハウス 指定介護老人保健施設 ケンゆのかわ 指定介護老人ホーム 永楽荘 介護施設 高丘寮
地域相談窓口
高齢者あんしん相談窓口 函館市地域包括支援センターたかおか 高齢者あんしん相談窓口 函館市地域包括支援センターゆのかわ

創立以来、
「当院しかできない」という
使命感を継続

函館中央病院の前身は、1900(明治33)年、3人の有志が、身寄りのない人を受け入れるために創設した「函館慈恵院」。明治のころから、函館の住民の健康を守る歴史をスタートした。30(昭和5)年、名称を「中央病院」と改め、今年、開院93年を迎えた。法人全体では、同院のほか2病院、特別養護老人ホーム等の入所施設、通所・訪問・居宅介護事業所、児童養護施設、看護学校など、複数のサービスを提供している。

本橋雅壽病院長は「1980年代に診療科を一気に増やし、90年代にはほぼ全科そろったといえます。函館慈恵院の時代から、その時々々の住民のニーズにこたえることが当

院の役割と考えてきたのだと思います。私は96年から当院に勤務していますが、「住民に信頼されている病院だ」と強く感じています」と語る。

1973年、未熟児センターを開設し、周産期医療に着手した。政策医療として公的な病院が担うことが多い分野だが、地域の実情を見て同院が取り組むべきと判断した。続けられ続けるほど経営的には厳しくなる。「当院がしなければ、道南でどこがやるんだという思いだったのでしょ」と本橋病院長は、当時の病院長の覚悟を思いやる。

「看護師や医師の中には当院で生まれた人も多くいます。「NICUに入りましたが、今はこんなに元気です」などと話してくれます。医療従事者として、自分の生まれたところだという感じで戻ってくるんですね。うれしいですよ」

虐待被害の
早期発見にも尽力

診療の特色の1つは、小児・周産期医療。道南地域で唯一、総合周産期母子医療センターの指定を受け、24時間体制でハイリスク分娩や低出生体重児のケアにあたる。ほかに、北海道小児地域医療センター指定病院、小児がん連携病院(類型3)の指定を受け、小児医療全般に力を注ぐ。

小児医療は身体的な疾患の治療だけでなく、虐待(身体的・精神的・性的・ネグレクト)の気づき、ケアでも重要な役割をもつ。虐待は、病院受診をきっかけに発覚するケースも多く、同院の小児科医は、「病院受診は虐待された子の最後のチャンス。見逃してはいけない」と気を引き締めているという。医師だけでなく、看護師、臨床心理士などが連携し、被害の早期発見に努めている。

性暴力に対し函館市は、病院や警察、相談機関などが

連携し、函館・道南地域で被害にあった人の救援支援を行う「函館・道南SART(サート)」を構築。同院は、特に18歳以下の被害者を対象に、心情に寄り添いながら、証拠採取、感染症検査、緊急避妊薬の処方などを行っている。

整形外科も特色の1つで、脊椎疾患や上肢、下肢の外傷、変性疾患、小児整形外科など各分野に対応する。経験豊富な指導医を中心に、専門医が10人以上在籍し、手術数も国内有数。研究にも力を注ぎ、米国の整形外科学会で毎年、発表する。全国の大学も含め、日本では数題しか選ばれない中、同院が複数題選出されたこともあり、同院整形外科での研修を希望する医師も多い。

初期研修医の希望も多い。10人程度の少人数を受け入れ、「2年間の研修が終了したら、たかましい医師になってくれ」という思いを込めて、マンツーマンで指導。同院と北海道大学とのつながりの強さを生かし、同大教授の講義も取り入れ、最新の医療や技術も伝える。

道南初となる腫瘍内科を開設するなど、がん診療にも力

特集 新時代の医療提供体制を 探る



開院93周年記念として、同院の歴史を記したポスターを掲示した。



クリスマスシーズンの小児病棟。



大規模停電時に住民向けに解放された1階ロビー。



全職種が利用可能な院内保育所。



診療を受けている子どもや家族を中心にさまざまなリポートを行う「こども子育て支援室」。



卒後臨床研修評価機構認定病院として臨床研修に力を入れる。



20年4月に更新した血管造影装置。高度医療機器の導入や更新も積極的に行う。



整形外科を中心に幅広い疾患・病期に対応するリハビリテーションセンター。

を入れる。北海道がん診療連携指定病院として、がん化学療法看護認定看護師による専門外来の開設やがん相談支援センターの設置、がんサロン「ほっと」や、札幌からヨガインストラクターを招き、がん患者向けヨガ教室を定期開催するなど、がんの診療体制・サポート体制の充実を図っている。救急医療にも注力し、コロナ禍では、当初から小児と妊婦を専門的に受け入れた。

本橋病院長は「補助金が出る前から受け入れを宣言したので、事務部長は困ったと思います。他院は小児科医もいませんし、当院がやるしかありません。職員も、一丸となって取り組んでくれました。そこが当院の強みだと思います」と語る。

当院がすべきことは何かを考え、 選ばれる病院を目指す

NICU、腫瘍内科など、常に新しいことに取り組んできた

同院だが、本橋病院長は「真っ先にやろうというのは間違い」と断言する。

「一番になる必要はありません。取り組んだことが良い医療か、生き残るかどうかは2年経てば分かります。当初は良いデータしか出さず、後に悪いデータが出てくることもよくあります。当院が取り組むものは、評価期間を生き残ってきたものをさらに選別するという感覚です。本当は、普通の医療を普通に、継続してできることが一番良いことだと思いますね」

その上で、自院の取り組みを外部に情報発信することは欠かせないと指摘する。病院での取り組みを発信し、患者さんに知ってもらうことが、受診の際の安心につながる。広報誌の発刊や地域イベントへの協力、スポーツ選手への医療支援など、同院に加え、函館市の魅力を発信することで、地域支援の姿勢も打ち出せる。

2018年の胆振東部地震で発生した大規模停電（ブラックアウト）時には、自家発電で明るく灯った1階ロビーを住民向けに開放した。トイレも自由に使えるようにし、真っ暗な中、

住民の拠りどころとして同院の存在感が増した。

働きやすい職場、働き続けたい職場になるよう職場環境の改善や福利厚生充実も図る。21年には院内保育所を新築移転し、全職種利用可能としたほか、医師や職員の働き方改革に向け、専任部署・専従者を配置した。また、職員提案制度を活用し、採用された提案から優秀賞を選出し、表彰。支出改善や業務改善に向けた取り組みも行う。

医療の質、収益力向上に向けた取り組みとして、24年に電子カルテの更新とピクトグラム付き床頭台の採用を計画。病床管理担当特命課長を配置し、効率的な病床管理を目指す。

今年、開院93年、NICU・GCU（未熟児センター）は開設50年を迎え、11月には記念イベントの開催を企画している。

「昨今、医療を取り巻く環境は、一層の厳しさを増していますが、少子高齢化と人口減少が著しく進む函館市や近郊の市町村において、当院ができることは何なのか、当院がすべきことは何なのかを考え、地域住民だけでなく、地域外の

住民からも選んでいただける病院として、函館中央病院なら間違いなく、函館中央病院を受診して良かったと言ってもらえるような病院を目指します」

特集 新時代の医療提供体制を 探る

HOSPITAL DATA

ホスピタルデータ

- 1900年、函館慈恵院開設。
- 30年、中央病院へ改称。
- 64年、救急病院に指定。
- 69年、胃がん検診車による巡回住民健診事業開始。
- 73年、未熟児センター開設。
- 2003年、臨床研修指定病院指定。
- 08年、総合周産期母子医療センター指定。
- 14年、北海道がん診療連携指定病院指定。
- 18年、北海道小児地域医療センター指定。
- 19年、北海道小児がん連携病院（類型3）指定。